

真菌医学研究センター Monthly セミナー

平成27年7月28日(火) 16:00~17:00
千葉大学真菌医学研究センター 大会議室

深在性真菌感染症領域で顕在化してきた薬剤耐性問題 ～農業から医療、越境する薬剤耐性～

真菌医学研究センター 臨床感染症分野

特任助教 萩原 大祐

本邦において深在性真菌症治療に使用される抗真菌薬は、アゾール系、キャンデイン系、ポリエン系、ピリミジン系の4クラス8剤に限られている。アスペルギルス症の治療においてはアゾール系薬剤の使用頻度が高く、特に慢性型の場合、経口投薬が可能である点でアゾール系のイトラコナゾールやボリコナゾールの処方が通常となる。しかし近年の疫学研究から、アゾール薬の長期投与は感染巣における耐性菌の出現に繋がることが示唆され、実際にアゾール耐性アスペルギルスの分離頻度が世界的に増加傾向にある。

更に悪いことに、投薬歴と関係のないアゾール耐性株がここ数年で欧州を中心として検出され始めた。これらの株は、環境中でアゾール系化合物(農薬など)による曝露を経由し、耐性を獲得したと推測されている。欧州各国のみならず、アフリカやインドでも同系統の耐性株が報告されており、世界的に急速な広がりを見せている。

高齢化の進行や免疫抑制療法の増加に伴い、今後我が国でも症例の増加が予想されるアスペルギルス症の治療現場において、主要薬剤であるアゾール薬耐性菌の蔓延は非常に深刻である。本セミナーでは上記のような薬剤耐性の現状を概説するとともに、我々のグループで調査している本邦における薬剤耐性アスペルギルスの現況や耐性菌のゲノム解析データなどを紹介したい。

世話人：笹川千尋 (千葉大学真菌医学研究センター長・東京大学名誉教授)

亀井克彦 (千葉大学真菌医学研究センター 臨床感染症分野)

連絡先：亀井克彦 (E-mail:kkamei-chiba@umin.ac.jp)